うれしな
むうろ
そゞろ小町
あらし小町
通 一二三

912.3
ウ

浮舟

是ハ都より出たる僧にて候我此頃
ハ和州初瀬の観世音に参籠申て候又
今都へ上り候
初瀬山夕越暮し宿もは
や〳〵檜原のよそに三輪の山しるしの秋
を色見えて猶行末ハ槇乃数ハ志らし波
さらぬだに物すごく宇治の渡りやれし宇

上
月も名に負ふ宇治の里、ねらひ来る舟
なれバげにそのかみの海人ハ志りて物へき
扨と兵部卿の宮ハ光源氏の御孫なれ
さるみに色ことに好みかりし人なれバ折ふし通ふ
あまた右の大将殿も宇治の里の名をとひ
ひとかたならぬ人をもそあはれと思ふ契りとハかかる
同上
さながら身ハうき舟の寄るべもなき橋姫

山陰の宿まですむ世ハ河よりもなほ夕煙
岸川浪風まで雲の絶間より雪かとぞ
山もと霞みて浪にもまがふ世に沈むから
柴舟とめよ我とまをとめや柴舟とめよ
おや　浮舟の事を委しく御物語り候へ
なほ物語り候へ　同上　語りて物語るその
昔を知る人もなき身の心もあれハ何かハ

くらふじきれ葉の　へ武れ枝あもあらぬ
雉子(?)背(?)をし世をやわらかすべき　名ば
墨ふ古き人のやまき絶移ひりふうひ
なからじ乱れわさけ筆のあら大将のあら
あれば冬へ移れり名人くらもあか
うくんさ夜よありてあれさふ古く緒ひ
これ都ひさられ世の人のかのめしきあ

しまる(?)津(?)さんかやかねれ袁(?)あん思ひく
帰(?)事(?)ありとしれありぬかさきれいに夜あさ
岸(?)の人かもかくてに雨(?)うつ(?)しありせし
もはや疲(?)なりし葉なりやをともまされ去(?)
山すそのあつさなりし森陰のものよ志らんか
浮乃原との打ち裾なれ　水の面も雲
星(?)なく　秋河よわ霧れて河の水(?)き(?)

きけん道は海よりもふかくしてぬいて哀
まねりつ方ハのかよふ門ぬ跡ふらひしく
晴ぬ眺めとまてふしも誠あるふ屋海さり
なん荒井角ハ思ひ絶けし世ハあふくもあら
たのむ跡もしまへるかく絵よ給ふく
誠ハ名り待よ給あく誠ハ未生 浮舟の
御事を家ハひぬ桐く法身をい深くハ給結

御そ 是ハ此宇治の里ハ通ひよ少なる地
柄ハまての若菜れた都の所くハ同結へ 其
かくさや絵やらんかとらぬひ乃るやかさて
小舟かくハ給く身結よ戸へそさ 鳴道ハあらし
あらしや松の声くハあけ道も桂川の水に
あかひくひ元振と身給ふへし 紅葉
北家の身ハそひくなやひとなんあの身

あかり法力もこれを結ひつゝおれはなく給やさん
とうとの川雲の波もなくけものなく寸ばかりは
きりかくらいもみな寸歳よきり へ ときも世
と宇治山の道遠出てくらきを世ふかき波
乃小舟の菊露ふさく哀をいひて吊らんあ
まをいひて吊ともし あはれ秋のさぬも同
に浅川よるべさだめぬ浮舟の法れかと是

むね也 上 わき御やどりの秋も浮舟のよるべなく
わすれたまふな世の人の心の中こそ思ひ知れ
世の中をあかつきもおそしと鳴声をうらみぬる人
こゝろ猶うりし書戸をさしてたち出られば風も
よし河浪わたる船のしらぬ男おりなき
つゞきみひ捨てしよりよそにみえつるこそ
果なく あはれさ身のはかなさ 我が身の末

しりを海ーやーおさ海ーやー海ーやーの花
〽小諸の名をあるとぞ深き事そあるへき
苦
喜ぬ上古(?)太平の理は世に應じ
これとある人わがものゝかくてすめるに出
河自然(?)新しき猶(?)光とあかしにて前をる
聞く世の人も(?)後の世ひとなるらん
〽象のこの海(?)の鏡(?)の音(?)の気(?)色(?)立(?)とまつ

此鏡(?)の薬(?)は流れのたよりは桂川
の見ぬひとまて千歳(?)の緑ひいのり加
おもしろき物の名はしも菊は世の頼(?)と
さてあかひむかし桂河は松の下は紅葉と
も色の都まで(?)はしるも今は盛をあかす
しなよりの身(?)ひらいたと思ひのたびの
まつ(?)の桃(?)のそれより(?)の辛(?)の生(?)活(?)られ

一さとはふるとしへ川は摂河はふるとしへ
いとゞ川摂川の松風ふくや添ふらん

玉葛

ワキ
是ハ諸國一見の僧にて候我此程ハ南
都に候ひしが霊佛霊社おかミ廻りて候又
是よりも泊瀬へまいらはやと存候上歌ならの葉の名に
おふ宮のふることも思ひしらるゝ泊瀬の末の
初瀬寺おかミて法の声三輪の杉
山吹の瀬々も初瀬河ふる里

舟より行淀川[illegible]越[illegible]
[illegible]淀川[illegible]
かゝ
水の上とも[illegible]のかげの
[illegible]人も[illegible]
の浦[illegible]
[illegible]
かの月[illegible]

これまでなりとみえつるが[illegible]の[illegible]
[illegible]声をたてゆく松風波の村雨[illegible]
[illegible]のうらぐもんこゝろ[illegible]
[illegible]
[illegible]
山川も山河のさゞなみ[illegible]
[illegible]

月まさハ如是我もいかにもよりはるかにましまして
是を浮須磨寺にましますてうき昔也又此河ハ
雨のふらば名にあれとも響も船ぞ須磨の山を
讃とけりがみて河畔への元かしわすればあまハ
あきは抱ハれとよ　実響も船納風と
ふかれなれ網ある人もなからぶみ多
氣も波やおもはずさして謂の秀名ん　や
何事のあはれはなりしも心澄みぬべき折からに
秋の月に見渡せば本松の世山風に
うかふ藤雲の月影も白ふ一むらのさそ
なまきしさもく須磨の浦半の眺めあはれ也
さしくるや西の尾河嘉吹きて黒つらく奥
物かなしさも戸の漢の折よなくの
青海よ鍬とて父の翁あれば翁とて父

[illegible]

やすんしまりて添せて斉通芸にあすまと

ミミ弟ひ給ひけん行　旦上　猪陵に世と

ミミ此

も親乃家見者の消あしあるあくれ

ミミ心得

御探子思ひゆこともう　しあるまと思ひの生

下 かくて此雲に乗りつつかくて此雲に乗りつつ
打 補陀落山も海のはるかに見えし眺めかな
折から庭の紫雲の空に声聞えて二本
の松よ見えけり二本の松よ見えけり
して 見えつつ二本の松も雲に入て雛くは眺めし庵
地 さてもさても見えつるか二本の松も雲ふかく見えしまゝ
心だにさらば折れ
下 二本の松にさらばと為

猶も昔女が河内へ行きしをあらためて
何とよ海辺までの寿もそれそ して 見えけい
みへ玉乃光の絵波風まかせに松そを
ゐやうへ年りて添せし青海苔に細まじと
下 岩ほの帯は緒は はへ行 上 猶祝ひ世を
猶父親乃家の有の清かしわれたちくに
何様子かへくもう おのれまし思ひの玉笛

なけてもやえてまりし 吟 いはくつのまれ
まの月雲井によそにのてかとさへはなれ衣
乃らはのこゝろもまたむへくさへるを
都そ春のふり 吟 わかれ行風さそう
須やかまさるや船よりもとなりとも松浦(?)の
廣みとてかへしよもはらや秋さてぐら
なみ浪を渡をかれても迎てもやいは深

と白浪のつきしかれ潮をまたはやすらふ方
かねがくれ都のそらも我ゆらむ旅の
上野やうつりかはる世も海にかへて
きよもりのかはらよそにうけたまはれ
あやむ足門の海にちや廣まれども
なにはの寺にまゐりて 年も経ぬ
ちよりげ須磨山 吟 尾上の鐘のよそのこ

思ひハふかき人に二度かへるの松風
ふりとも月ハ嶋の浦へとひかりありか
まことのわか世も同じ月も思ひ入浦の夜
見しまぼろしの夢の浮世は夢ぞかし猶へや
猶たのむ世の物語りぞうけハ涙をさそふよ
うちかへしわかれの袖ハ思ひのなこりかな
仏法ぞかりけるやゝ志るしやわかるゝぬ　同　へ縁となる

同
へ名をしるしのみか　同上　是ハまことの方にしるし人の
弥陀へ我そうぞ涙の夢と見しもあの君と契りを
思ひハ嬉しき事にも君によりてかなり
へさてこそ此寺の霊地となりにけるや
毎年八講朝暮のつとめ　上　照らすや月の
光ハ大悲大慈の誓ひのあつき法の功わかる
これなかりけりいさやまかりかへるく　へ逢ふまでの

かくぞれはなをもろくがれてもちとなと
見きゝなん。説きても法の蔵にをさめん
さとりの道の一筋にさる梅ちんてまちうて
あふがんふ海し又も能もや法くまうく
治まりし我やおもく両部の大日堂
おもちりれ御代やへんとはかへと桃
此の参詣関ちや黒髪のわかね屋は

川の流れも絶えずとそ世に出ひかり
猪熊舎の雲霧れく生れもよりやうい
あづま路を須磨の山気もけしく雲しげ
もちはく秋の名月も桂の
めぐりや昔へ限りとも世を限りとも世を
もだひかりし亡身ひそれむしてねんれつうや
粘れられ名にはうちとさん妻の名残る越え

きよん是にてもはの袁はおれん
かびひろくて一筋にも通くあやしてあるう
[illegible]あしたふてば[illegible]ゆうに[illegible]

わきかへり岩うつ水のよどむせは残らず
御座所より出て玉としみまてつかへる宮
はなれつゞきよりおやかくしとけふ寂
とおなじくちぎりての玉の上の玉高しと王那
の玉のはなれ菩提をさとれはなり

卒都婆小町

次第 二人ワキ
山はあさきにかくれがの山はあさきにかくれ
がのふかきや心なるらん 詞 是ハ高野山の
沙門にて候我此度霊佛霊社参詣の為都へ上り
候 夫前佛ハ既さり後佛ハまだ世ニ
出ず夢の中間に生れきて何をうつゝと
思ふべき適うけがたき人身をうけがたき

如来の教法ハ随縁真如是ぞ悟りの種なる
と思ふ心もひとへなる雲の衣に身をなし
しそ生れぬさきの身を知れば憐むべき
親もなし親のなき身ハ恩を知る心もなし
浮身もなし里をゆく雲を我ゆくも師よ
かかる山より海のそこ寒き松風の音なり
高野山を尋ねん為物狂ひ

ハ花さへやかへの松原よりやよみ出て
山中の嵐もかはるや世の中 身をしれば
草に酒をくみ身ハ旅の蓆を飾るか
らんを分けのぼれ 急ぎゆきはいかに見ん
憐憫の心ともなりて猶翡翠の黄金
嬋娟たる両鬢の楊柳ハ春の風よ
柳のくるしを又紅葉の色のさかりは心にまかす

くは深草藤のかてうらは咲神の花から
も稲穂も今なる民間秋のゑはさへるさ
あまれ法人よ船ともらし嬉しの月日
身は猶く百年の齢をとらへてさふ御代
又人西浄海やとしよそれから又ま薬
上
扶りあそれ出でく越へて雲井百歳や大
刈当の山岸もゞ受所々もよ花ほらかし

東隣豊くより菊やの流れの恵み秋の山にて
うる川勝奈ゞ花ゆく人も汲めも汲むも
今とはれやらん
詞
是は彭祖が菊の水の枕なるやらん
彭祖より慈童より酈縣の山の下の菊の水
扨は不思議の慈童よりや思ひは
又
あふく先帝の位正人の流れは今の深き
と受けつたへて彭祖は八百歳の齢を保ち
あくハ八百余歳を経しそのはてに文帝おくりては

いよ〳〵是非なき人々おごの世にけのあつらぞ私ま
佛神色相の華報清浄なくハあらざるぞこゝ之塗
でよの示に徳ミ以へ　佛神色相の来りさ
えの海へ凡是物文字もなし寸割かる所
もあり只指本しらそこしれ　銀漢山乃
梅花蔵九花咲し未ふくれなし況佛神よ
列れ清木あと具志有しあらへき　我々

抑さ深きあまてらさの花ぎ海さわさ
ハ如何よおそろしきんきて佛神なる人
さ謂さいれ　丈尊釈迦も金剛護
壊ぞも是出化して三摩耶形もかのおふ
いかの五有形さいれ　地水火風空
五輪五躰ハ人の躰なれば論ずれバなる五
所さそれよあらの五躰ぞ功徳あらへし

さてそれの功徳ハいかに　一見卒都婆
永離三悪道　一念発起菩提心も
いかでかおとるべき　菩提心あらバなど憂
世をバ厭ハぬぞ　姿が世をもいとハゞこそ
心こそいとへ　心なき身なれバこそ仏体を
しらざらめ　仏体と知れバこそ卒都婆にハ
近づきたれ　さらバなど礼をバなさで

敷きたるぞ　とても臥したる此卒都婆我も休むハ
くるしいか　それハ順縁にはづれたり
逆縁なりとうかむべし　提婆が悪も観
音の慈悲　槃特が愚痴も　文殊の智
恵　悪といふも　善也　煩悩といふも　菩
提なり　もとより　樹にあらず　明鏡又
台もなし　実に本来一物なき時ハ仏

も衆生も済て給ふ　本より慈悲深き
衆生をば救はんための方便の源を探れば
我が師釈尊の逆縁なりとも遂には
此世は悩みにて佛も不思議人也とて僧は
魚を捕りつゝ殺さ礼し給へ　我ら
今滅後に至る代々までの為とかや
念仏楽しむならひ心得そめしは

衆生の為に佛の御法の教化や
我僧の教化や　是を外の方々へ
我が身の為をも修して思ひ給へ
人なり我が者をも為さんための
居ても立ても
我らが身の為をも為して
是は先祖の知恩報謝の為なり

野小町かなれる果にてさふらふなり　痛
はしやな小町ハ　さもいにしへハ好女にて　花の
かたちかゝやき　桂の黛青うして　白粉を
さす　羅綾の衣多うして　桂殿の間に
あまりしぞかし　されハ雲通もおとろへし
去ハやかてふるひとも通さらぬハなし
面白きをと　されハ翠黛の流乃ちいつのまにかと

哥を翠雲の簪ハ風にみたれし
と　蝉鬢うすのへ紅顔の粧ハ　芙蓉の眸に
綻るゝおかしうて　歌をよみ詩を作り
酔をすゝむる盃ハ　漢月袖にしつか也
まことに優なる有様の　其程にひきかへて
てかしらへハ　霜蓬を戴き　嬋娟
たりし両鬢も　色あせなよかし　まなこもほそみえれ

寃猶くわ奴娥も壽山に名をとゝめふや
百年ふ下世をねはくも婦女かはやらし
今有の新恥をさらし涙にむせひ
寶鏡にハいまの勅をいまそかふ
も叔今ち孫ごもかれ亂をとすらんと
覃豆の飯と囊に入て持ち帰る縁に
たひかさなりて娠腆のわかちのなき

侍に無き處逢ゆハ四寶かと騰華をとゝめ
被襄　被蓋　両ちやうもかさね
浴して衆雲霧海濺とゆふはかとまてち
さ被も袖もおちられ今を語なにさ
もてハ漬暮乃へと勅をふるに浮ぬ附を
熟公又粗亂乃仏流さ九遠く身も
かす　奇ふ捌て奇ふ在世お清めふ

シテ何事そ　シテ小町か許へかよはふよなふ
ワキおことこそ小町よ何とてさやうに
現なき事をハ申そ　シテいや小町といふ人ハ余りに
色か深ふてあなたの玉章こなたの恋文
かきくれて降る五月雨の空言なりとも一度の
返事もなふて今百年になるか報ひて
人の思ひの積りて　あら人恋しや
ワキさておことにハ

何か憑添ふてかやうにハ申そ　シテ小町に心をかけし
人ハ多き中にも殊に思ひ深草の
四位の少将の恨の数の巡り来て車の
榻に通はん日ハ何時そ夕暮月こそ友よ
通ひ路の関守ハありともとまるまし
や出たゝん　地浄衣の袴かいとつて
立烏帽子を風折り狩衣の袖をうちかつき

め猪のくびにさし烏帽子にさとり将家
此紐を打からびく人目もしらぬ通路の
ほふも拍子にすふも拍子雨のよる風の
拍子もあまの[illegible]此時毎雲ふし　へ影は山
おもしろくと作りて八海(?)りゆうてや拍子一
拍子二拍子三拍子より七拍子八拍子九よりぞ此時
乃[illegible]合ませおりそそ海辺ふ鶴(?)啼く時とて

御寺聴乃撫(?)のちいる百拍子まれとあひ
又そのことに九千九拍子よありふる　へおもく月
まつ風　晴(?)くの中も来しそて一拍子と海
こそ記しなし源(?)業(?)此妙(?)猶乃(?)会
り待ちし程よ物ふそふはりするそや
下
是(?)れつけても後の世をも来々そ海也と
ありがたき鐘を撞くと言ふ黄昏の鐘(?)

らあ風ハ花を佛よ手向て帰るの道よ
いらふよ帰り花たれいらふよ

鸚鵡小町

大臣二人

是ハ陽成院に仕へ奉る新大納言行
家にて候扨も我君敷島の道に御
心をよせられハあまねく歌を撰せんさらま
ひへ天ばんよりみふ宮しばに生物の宮
小野のよしさ孫らもとめ小野小町が果
はなへしハなり新乃上にて作りし今を

百年乃よはひおりし関寺邊にわかうし嵯
しめおもよされば世をとはされば世をいふに
よりかさねて顔もとちさ濱へとさとの宿前
よ海をも見し関寺邊小野小町の宅へと
いそぎ行舟にひかれ稲にも任せ松
此やと浮見え河原より川の辻いつ文せかのゝ
ちまるさあんむかしに桜よき花紅葉

いにしへ寿をまつて今はおいてかれ草とおかり
かわりし世は世とはいひよおもとろへくらへ浮流
のあはれのもつれさつえ浮くかへてちゝしあり
人とかうら身をちらぬ御からまいれやれ
ち孫ハ物とひとへはいふさりとてれに
たえぬ命乃身にそひ行くおもけは
浮くもうさふからみ世ハかゝらしとむとせ

ろふ志のひ路の夏も路さめれなゝ花
とおぼさるゝ雨我むつく　嵐のかへ
小町かくれなし　見なれし雲のうへかくれ
よまれしが小町と成のそや御事かくれぞ　撫子の
なさけつくと上みもしらめきりそ　玉と
むかしは嵯峨れ九ゞ只閑寺は今日拾と迷り
仏　実し閑寺今熊と勲とゝ済くゞ宗承

おりはへさ左右也　兼かる牛馬乃通ひち
たゞそ　光さるゆき繰しさもすれ　行
志ろ小はまいきんの山さかく　志ても道
まなく　八咲や　去乃を　左まを進只なり山
きさ乃くらきあれかは志る雲はなれかゝ見
えておりなや　松風をかけひ掬よ花ちりゝ
そ我とゝり我志る雲の名香おりなり　何と

瀧乃宗寺に詣りては　いふに小町が今も
言はれよむへきつ　釈いふへとのゝ仏間の
実りありし時こそおもしろよそへこそともよ
思ひかへ今は花と花乃かたちをかくる露の
ことわりさ海かく浮世にあらぬかたりの
ゆへは　寶光院理如みくよりはかられ
まへは斎と申されてのちに是まで見ひとへ　繹

なみ山よもまよひうみの志賀寺の花にほひ
もれ出てひかりのとだえもへなき
やがて山の観世音菩薩田乃もとへ参る人の
つまされいのちもをしからぬ身べし　かくて都
乃恋しき時にぞいのりにきつとも山通
きどりくみまれば毎日のつえにもすがり
都小坐くらのとぶらひ時なるを

渡乃宗寺に詣りしも小町ぞて今も
あはれむへき　持ひかへしもかへり仏間の
哀りありし時そむらとへくをしらよ
尽しか今をも花の我乃わかむそめくぞ秋の
うわうわりき海なく浮世にふらふれる
ゆくは　寶丸道理也みとよりはわかれ
の身をまされてのこまよく思ひへ　待と

漣やよせ来る波の志賀辛崎の一松
ら身れてひとりの友となれへハおりから
やがて山の鐘世尊寺乃ともをたて人の
つまる心のあらわれつ浜の声へしかくて我
乃恵しき時ならぬ心のいかなりに寺ってもこ色
きゝりかまれハ兎もあの伝への花もとり
都小夜のとかく仏のとをひえね時らさ

湖乃寺に鳴りわたれハこれ山時ぞ今も
夜深よ山へかね我に合へ云のりか仙洞の
実り面りし時そを花入道へくすりとよ
君しか今もて花なて花乃おかむそめくぞ声の
うけつわりと海中に浮世にあらふふるか
中く也 寂滅道理也 みよやりのなかれ
さえは有さをあらされてのごろ春へ見 鐘

見んとよりも此字の仙家とあされ侍くはと
やおもしろやは老眼とや文字もさうれ
見んとさうれは、それ侍るくわそいされはへと道すれ
歌りよら字　にしてハ変はへ　いふまもたら
うれわそとされはへ　雲もうへと　雲の
上　雲のうへとわうもようり孫と
見た露されのうやゆうき　わくおりるの

此字やは　下　ふやかうれとらんく
みやうとめすとされとおよもへやも
歌や室れさね附とおされ也所治は遠
文字と八字一字也くやはへ　上　よくるの事と
中納言がれは三十一字と法く孫くれが
のまぬとおもれ一字也遠かよ事た
是字類多の有所読　操えいふ文字

こそ波路を来れ　それ文字といつはされば
満つみちの川瀬と詠ませし也詞の中し
ふきんなからもいはおかけの雲の中に
むかしの新にとがめ出されのぞらやゆしき
されはからやゆしきとりのけくぶら残ゆう
ゆきとよも御門小御かよふと詠也会也
満をかへをかしかの本の御ゆ流

我等がやうなる事もとの事は山家暮
根とやありがたきの御衣をだし揺
てよも御身の天のそれをいかにも和歌
乃みちも花もゆかりまたせぞ
うけ給高徳の海の事ぞ和
新の法るやく　それ新乃海をとる
めぐらせ我らかせんをさの折句をいゐ

あんない御おかたへしづからいふんもうかり
御ほしくわかむへしいかなずらるよひきの
是ありて君ともかむさいりびんのいふ士家
とうけくださるらとのうきへのりとはずれと
此ふる御引抜こて[illegible]
の趣御もかくの[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

ちくまでも此花に淡しらまでたゝ我あまた
おひつきも川風にあかいやかりまみえなん
とうたれかとり契は後々の成しかど
今せうらはまおもら京まて所々妹は小町なら
小町そあやまち湖かるいつれ小町なりけり
なまはましまゆく此花しらくれ行き
ようみかくして世のへ　抑も業平玉津嶋

にまつり終をて哥しらへ秋まかれしまりしと
都とかやの都をそあてらすの山はそのまま
こゝ近く和哥の浦にさうらい　玉津嶋は奉り
つゞく業平のまひの袖せ紀の有常の
ありさまも絶のうきねにたかれのもの婦のそ
ちゞとりあさおりきかしまれつ　和光の
ひかり玉津嶋　めぐらん袖やあらたかや宗

和歌の浦よしかへらんとせしがさすがこの
葉人をさそへばれるすみなきこゝろ
またもよりあやしの翁のくはとがめ
て
これそらの満れれの人の老さかる
桃をかゝへたる花ひらけの時人を
海とねがひもとめものあはれのむ
に風が
かくて月も暮れはるゝもさへ

とはいへど衆もやされかへりきれはお所も
みそ道乃あり とほりてよろ
くゞ志乃通の袖のみださらはれ
袖乃あふぐも関寺の庵にかへり
けり

通小町

ワキ 是は八瀬の山里に一夏を送る僧にて候、
扨も爰にいづくともなく女性毎日木の実爪
木を持て来り候けふも来りて候はゞ木の実
の数をも尋ばやと思ひ候はゞ木の実ひろふ木の実も
橡ひろふ木の実もたきゞの白河の袖
みなれし
是八房ならぬ是の数を女

花をば桜も八重の山里に貴さも隠れわ
さりながら朝にゝも木の実妻木を持て来り
ばきふはよ文来ゝやと思ひばいつしか月へ
案内申せば木の実妻木を持て来りては
毎日かの妻木を持て来り給ふ志ばさ
ゑゝかゝのに此程も心付けは給ふに
ゆふとへあはれはゝ心ざしばせ無上菩提の浄飯

玉の都を出で檀特山に入りさりし道菜摘み
山の薪くゝ香木の実を拾ひ仙に
今は仕へ給ひのそうし沢芹も根のみ摘
あひろ根芹若菜を君をとふも志
らぬにも樒くゝ木の実のなれはばかりとも
よしあるかな上也むかふ木の実はなかなかくれて
かゝかふ木の実は何ぞそ上かへりなれ車

小柑子にも実よりこぼる落椎 〽青への家
の木のこゑや 〽人丸の垣かの柿山の〽の々
栗 〽家の梅 園の桃 花ある木なく
梅わきの生れ 御梨なりもわりなりけり
また佛ぬ 大小柑子金柑ばかり若菜もしき
花橘の一枚花のあるやの一つ 〽まれ
あるくは名のひぬ伝がくれ名をとは花なりける

恥かし風との名を訪ね 見せぬとは思ひ落葉さる
なれたと見れば なかなかなりし人にも〽お
傍にて見る花生え枝よ若かれわさけ手折
よ若かれ〽今の女性の名をとやうにも
ただ女性とはやがて若き生に大事なりにて候
うちそれと手折りてお見ぬは見えて思ひ
此世の事の数々人の衆生と添ひける

一村の中より聲ありて 下 秋風のふくにつけて
もあなめあなめ小野とはいはし薄生けり 是小
野小町の歌なり 唯今の女性ハ疑ひ
もなき小野小町の幽霊なりと市原野
邊に出て小町か跡をとふらはゝやと思ひ候
上 此草庵を立出て
市原野へ分入て座具をのへ香をた
き 下 南無幽霊成等正覚出離生死
菩提 上 うれしの御弔やおなしくハ
戒を授け給へお僧 いや叶まじきおそ
ろしや 戒授給ハゝ恨申ぞや 猶々給へ屋お
僧 うらめしや適々仏法にあへて得ん菩提
とこそ思ひしや ふたりなからに縁をこそ
果なきうらみの菩提 又それかうへのさまよひ

七
「寔に[illegible]弥陀[illegible]衆生ハ御仏
れ[illegible]へや
御仏達[illegible]
迷ハ[illegible]佛道[illegible]唯[illegible]と文
[illegible]へ「人[illegible]我[illegible]一心の
限[illegible]御仏[illegible]
七
「つゆと我[illegible]

「ク　思ひハ山の下[illegible]
海「さるハ煩悩の[illegible]
難行「おそろしの[illegible]
ともし[illegible]
の[illegible]「さてハ[illegible]
[illegible]の
[illegible]

本より神代の雲の海年へしのわりなさと
我と思へば曉おもふ思へば東の旅にゆけは
東の都みてつやぶをかへよとの
こと東路いふよ及ぶらむ 川の思ひも
山城の旅情の里に馬をおさへて
思へばかかるてるも さても宗盛は 笠の錦
我が浮世とや行の杖 風に花の袖
暁の寺 さても宗盛は 袖をおさへ
さても最後の都へ 見るもおなじ果ての百も
そうや 滴る思ひぬ時も 独
よるの浪の雨に わが暁の都や 久
一夜あかぬ思ひの都 久しき人の 一方
あかぬ思ひの都 風に鐘ん風をまつ
らん我とは海に 虚しや 曉色く

猶くおかしく思ふらんか「あらおもしろの人ハ曽
もよしなけ鏡も持たず直衣よめく
独りあらハ遊らうら上の待よらを後くて
建てく揚の程あらそれハ九十
九夜形りの今こ一夜よ染めて白し
あらね恋されゆん心添からいハ「鶯も見
ふらし「かさより烏帽子「簑とてあ

あれ「花摺衣の「色重ねうら
されのふらちも庵結ん抱をわらそら
やさしやまたも「紀装狩衣の錦
綾けうく汀の綾錦も肩衣
重なりそれもいたみめるハ多毛ふんと思く
一念の情りゆるかの罪を懺して小舞く
前も成得とも菩提佛道成りきの

右下條諸者往々板
行雖多言違章誤難
計勝今亦闕不補
不足當流秘密之加
拍子令改正者也
元禄二歳己巳初冬吉辰
日本橋南通三町目
刊 鱗屋喜兵衛